

貴重書紹介

―天保の改革と発禁本―

今回紹介する貴重書は、江戸時代後期の人気作家・山東京山と人気浮世絵師・歌川國芳のコラボによってかかれた長編絵入り小説（合巻）『朧月猫草紙』です。歌川國芳といえば、浮世絵「東海道五十三次」のパロディ「其のまま地口猫飼好五十三疋」を描くなど、無類の猫好きとして有名ですが、京山も猫好きだったようです。そんな二人の猫好きが作り上げた本作品は、國芳の描く達者な絵柄から、人気を博しました。

物語の舞台は鎌倉、主人公は鯉節問屋



山東京山作、歌川國芳画『朧月猫草紙』
天保 13[1842]・嘉永 2[1849]
/000/Z00/M0653.1~M0654.7

芸妓たち（右上・初板）が船宿の女房（左下・後摺板）に改刻された。

「又たび屋粉右衛門」の飼い猫（おこまちゃん）です。おこまは、恋しいオス猫の（とら）と駆け落ちしたり、別れ別れになったり、名家の娘・撫子姫の飼い猫になったりと波乱万丈の人（猫）生を送ることとなります。

本作は天保 13 年（1842）、江戸の地本問屋・山本平吉によって刊行・販売されました。地本とは大衆本の総称です。この時に出たのは初編と二編のみで、三年後に三篇が出て、以降毎年正月に一篇ずつ刊行され、嘉永 2 年（1849）に全七編で完了しました。

天保 12 年から始まった天保の改革では、華美な風俗が取り締まりの対象となりました。出版に関して言えば、天保 13 年 6 月に歌舞伎役者や遊女・芸妓などを描いた錦絵と、歌舞伎役者の似顔・芝居の趣向などを表現した合巻の出版・販売が禁止されました。あわせて、表紙の色刷りも禁止となりました。

すでに出版されていた初編と二編は鮮やかな色刷り表紙で、歌舞伎役者の似顔も多用されていたため、絶版となりました。三編刊行時に初編、二編は、表紙は地味な彩色に変えられ、芝居や芸者等の禁忌に触れそうな所はすべて改刻されて出版されました（写真参照）。

本作品は、4 月 8 日から開催される専修大学図書館 春の企画展「時代にゆれた表現の自由―江戸から平成、そして〇〇―」に展示しています。この作品の他にも、吉原の遊女が一般の女性に改変された例なども展示しています。

【主な参考図書・サイト】

参考図書は図書館に所蔵している本ばかりです。是非 OPAC で検索してみてください。

- ・今田洋三『江戸の本屋さん：近世文化史の側面』日本放送出版協会, 1977.10
- ・鈴木俊幸『新版葛屋重三郎』平凡社, 2012.2
- ・『日本古典文学大辞典』『細見』項（向井信夫執筆）
- ・北村鮭彦『お江戸吉原ものしり帖』新潮社, 2005.9
- ・山東京山作；歌川国芳絵；金子信久訳著『おこまの大冒険：朧月猫の草紙』バイインターナショナル, 2013.11
- ・佐藤至子『江戸の出版統制：弾圧に翻弄された戯作者たち』吉川弘文館, 2017.11
- ・安藤優一郎監修『江戸の色町遊女と吉原の歴史：江戸文化から見た吉原と遊女の生活』カンゼン, 2016.6
- ・茨城県天心記念五浦美術館 HP <http://www.tenshin-museum.ibk.ed.jp/>
- ・ポーラ文化研究所 HP <https://www.poholdings.co.jp/csr/culture/bunken/>
- ・アサヒビール大山崎山荘美術館 HP <https://www.asahibeer-ovamazaki.com/>
- ・ジャパンナレッジ Lib 日本大百科全書 <https://japanknowledge.com/library/>

編集後記

今回は、江戸時代を代表する遊郭・吉原の特集でした。吉原という場所の、光と闇の歴史を少しでも感じ取って頂けたらと思います。吉原に限ったことではありませんが、うわべだけにとらわれず、様々な側面から物事や歴史を学んでいきたいものですね。それを支える皆さんの資料とスタッフが、図書館でお待ちしています！

奥付：

専修大学図書館
平成 31 年 3 月 31 日発行
題字：荒川依知

※貴重書のご利用については、「ぶんこ」創刊号をご覧ください。
<https://www.senshu-u.ac.jp/news/20171031-12.html>

ぶんこ

専修大学図書館 ニュースレター 第 4 号

特集！ 吉原と江戸文化

「ぶんこ」第 3 号ではグリーンベルクがもたらした活版印刷術に関連し、印刷の流れを特集しました。それまでは手書きの写本しか

広がっていきました。しかしながら、情報流通量が増えたことにより、本格的な検閲、ひいては出版規制も行われるようになっていきました。

4 月 8 日から開催される専修大学図書館 春の企画展「時代にゆれた表現の自由―江戸から平成、そして〇〇―」では、出版規制と情報流通量が増えました。第 3 号の特集でも触れたように、日本では活字印刷よりも製版が主流でしたが、書物は庶民の文化へと

理由については 4 面の貴重書紹介で説明していますが、彼女たちは規制の対象となる一方で人々の憧れの的であり、当時の文化に多大なる影響を与えてきた存在でした。今回の特集では遊女や遊郭が集められた吉原について掘り下げることで江戸文化に触れてみます。

*今号で掲載している資料は、主に「専修大学図書館向井信夫文庫」に収蔵されています。旧蔵者である故向井信夫氏は、読本や草双紙といった江戸後期小説だけでなく吉原細見のコレクター・考証家としても知られていました。

歌川國貞画『けみせい高尾 沢村田之助』

高尾太夫を演じる歌舞伎役者・沢村田之助の役者絵。高尾は三浦屋で代々襲名された、吉原の歴史に残る太夫（最高級の遊女）名。傾城は色香で城や国を傾け滅ぼすほどの美人の意だが、近世では特に太夫を指す。

第 4 号 目次

P1・・・特集！ 吉原と江戸文化
P2・3・・・だいじえすと吉原
P4・・・貴重書紹介

専修大学図書館 春の企画展「時代にゆれた表現の自由―江戸から平成、そして〇〇―」
【会期】2019 年 4 月 8 日（月）～ 6 月 1 日（土）
※日曜、4 月 29 日（月）～ 5 月 4 日（土）は除く。
【時間】平日 12 時～ 16 時
土曜 10 時～ 14 時
【会場】図書館本館研修室（生田校舎 9 号館 3 階）
江戸時代、戦前、戦中、戦後から現在までの時代の変遷とともに、規制に翻弄されながらも出版された多くの資料をご覧いただきます。本学図書館所蔵コレクションより、「向井信夫文庫」の江戸期和本や、初出品となる「カストリ雑誌コレクション」からも資料を展示します。

吉原ってどんなところ？

吉原は、江戸時代の幕府公認の遊廊（周囲を囲われ、多くの遊女が集まっている一定の地域）です。一口に吉原と言っても、今から約400年前の元和4年（1618）、日本橋人形町で営業を始めたのが「元吉原」、その後土地の狭隘、風俗上の問題などがあり、1657年明暦の大火を機に、浅草寺の奥、山谷地区に移転して昼夜間の営業を再開したのが「新吉原」です。落語などに出てくる「吉原」はたいてい新吉原の事を指します。

元吉原は、遊女屋西田屋を営んでいた庄司甚右衛門（1575-1644）が、江戸市中の遊女屋を集め、傾城町（遊女屋の集まっている町）の設立を幕府に出願し、日本橋晝屋町続きの葎や茅が生い茂る低湿の土地を埋め立て開業しました。葎を刈り取って町をつくったので「葎原」が転じて「吉原」となっ

たと言います。新吉原は、総面積約2万700坪という広さで、東京ドーム約1.4倍の一大歓楽街です。周囲は黒板塀が張り巡らされており、その外側にはおはぐろ溝（遊女たちが使ったお歯黒の汁を捨てたところからそうよばれたらしい）という幅3.6メートルの堀がありました。

周囲を黒板塀とおはぐろ溝で囲まれた広大な吉原への出入りは

魁」と呼びました。「花魁」は吉原独特の呼称です。

花魁になるには、美貌だけでなく、大名の相手ができるくらいの教養も兼ね備えていることが必須でした。彼女たちは、和歌・俳諧・漢詩・書画・華道・茶道・琴・三味線・碁・将棋などをマスターし、しかもその中の一芸に秀でていたほどの才女です。吉原遊女は、富や権力になびかず自分の意志を通すという「意気地」と「張り」を大切にしていました。それは高い教養から培われた自信により生まれたと言えるでしょう。

新吉原に移ってからは次第に太夫の数が減り、宝暦年間（1761-64）になると、太夫・格子はいなくなりました（宝暦以降の階級は【遊女の階級別揚代】参照）。

【遊女の階級別揚代】

	遊女の階級 *宝暦以降	あげだい 揚代（遊女と遊ぶ料金） *天保前期	
		昼夜共 （一泊する）	よるばかり 夜斗 （夜のうちに帰る）
花魁	よびだし 呼出	金1両2分	金3分
	ちゅうさん 屋三	金3分	金1分2朱
	つけまわし 付廻	金2分	金1分
（花魁に含めることも）	ざしきもち 座敷持	金2分	金1分
	へやもち 部屋持	金1分	2朱
	きりみせ 切見世	一ツ切（線香1本が燃える時間＝約10分）で100文	

*実際には揚代だけでは遊べず、料理や酒、芸者代、遊女への小遣い、引手茶屋に支払う金などもかかり、屋三の場合で合計5両かかった。

*金1両（現在の10万円くらい）＝金4分＝16朱＝銭4.000文



『吉原細見五葉姿』
天明3 [1783]
/000/Z00/M2904
（葛屋が吉原細見の板株を独占したときに刊行されたもの）

葛屋重三郎の独占
安永4年秋、吉原に店を構えていた本屋・葛屋重三郎によって新しい趣

吉原細見の初期

当初は一枚図でしたが、享保12年（1727）に横型本が登場し、以後安永年間（1772-1782）までこの形が吉原細見の定番となります。

『新吉原細見』【寛政4（1792）】
/000/Z00/M2911
『南総里見八犬伝』の作者・曲亭馬琴が書いた序文



『吉原細見仇鏡北里の燈』明治20 [1887] 序
/000/Z00/M3024

口絵が写実的だったり、本文が活字だったり、近代的な印象の明治期の細見（この8年後の明治28年に、樋口一葉『たけくらべ』の連載が始まります）

りに灯を灯し、そこを通る豪華絢爛の花魁道中は吉原最大の行事で、庶民はこぞって見物にやってきました。

堀と堀によって隔離された吉原は、江戸の文化を育みつつも、ほとんどの遊女が大門から出ることなく一生を終えた、遊女たちの光と闇が交差している場でもありました。深川をはじめ岡場所（吉原に対して、「傍」、わきの場所の意味。非公認の深川・品川・新宿などの遊里のこと）の急激な発展により衰微、昭和33年（1958）の売春防止法施行までの約300年間、公認の遊郭として存続したのが吉原遊郭でした。

吉原の主役、遊女

吉原の最盛期には、6千人を超える遊女が所属していたと言われます。それだけ吉原が繁昌した理由のひとつに、遊女の年齢の若さがありました。吉原では、切見世という一部の見世を除き、遊女として働けるのは27歳までだったのです。

10歳以下の遊女見習いの少女を禿と呼び、彼女たちは遊女の身のまわりの雑用をしながら、行儀



江戸っ子はみんな読んでいた？「吉原細見」

吉原で遊ぶ人たちが携えていたのが「吉原細見」です。これは、吉原のガイドブックのような冊子で、江戸の普通の成年男子なら吉原細見を見たことがないものはいないと考えられるほどの大ベストセラーでした。

吉原細見とは？

吉原細見とは、江戸新吉原内の娼家・揚屋・茶屋などが地図のようにに町ごとに記載され、さらに遊女の名前がその所属する娼家ごとに記された冊子の総称です。江戸初期から大正5年（1916）までの長きにわたって、形や板元を変えながら、毎年春と秋の2回定期刊行物のように大量に刊行されました。

や諸芸を習います。将来が見込まれると、一流になるための英才教育を受けました。これも、吉原が他とは違い特別である理由のひとつです。そして13、14歳には接客法を見習う新造となり、17、18歳で遊女としてデビューしました。

遊女の多くは、貧しい家計を助けるために親に売られたり、自ら身売りした者たちでした。そのため、世間から親孝行者として評価されていました。それにしても彼女たちの境遇は過酷でした。自分が売られた金額を体で稼いで遊女屋に返すのはもちろんのこと、衣装・寝具・妹分の遊女にかかる費用・暖房用の炭・葉代など、すべて自分で稼がなければなりません

遊女は江戸時代のファッションリーダー！！

遊女のファッションは庶民の憧れで、流行の先端であり続けまし

江戸時代を代表する女性の髪形は、兵庫髷・島田髷・勝山髷ですが、いずれも遊女や歌舞伎などから生まれ、一般庶民まで及んでいきました。勝山髷は吉原の遊女勝山が結い始めたと言われ、元禄（1688-1704）の頃吉原で大流行、のちに丸髷に発展しました。

また、髪につける飾り櫛は、江戸時代初期に遊女が挿しはじめた

向を凝らした吉原細見が出版されました。それは、町の通りを挟んで妓楼が上下にらみ合いになる形式のもので、のちに葛屋が吉原細見の出版を独占するほど好評を博しました。

葛屋重三郎とは？

葛屋重三郎は、江戸文化を代表する出版物を数多く世に出した本屋です。葛屋重三郎（葛重）は江戸新吉原に生まれ、安永元年（1772）に新吉原大門口五十軒道に本屋・耕書堂を開業しました。当初は茶屋に間借りして貸本業を営んでいたと推測され、そこで培った人脈と地縁・血縁を生かして吉原細見を出版、販売し始めました。吉原地域の販路を独占した上に、丁数を削減したため安価で売られたと考えられ、天明3年（1783）には他の版を圧倒して細見の板株を独占

色々な吉原細見

葛屋重三郎時代は、朋誠堂喜三二や式亭三馬、十返舎一九など著名な戯作者が序文を寄せることもありました。

と言われていいます。簪をいくつも挿すのは遊女ならではのですが、1ページ目の浮世絵『けあせい高尾沢村田之助』のように12本も挿すと、その重さは6 kgほどにもなりました。

文化（1804-18）頃には、口紅を下唇に濃く塗って玉虫色にする笹色紅が流行しましたが、これも遊女から起こったものです。ただ、紅は高価であったため、一般女性たちは下地に墨を薄く塗り、その上に紅を塗るという方法で笹色紅と同じ効果を出そうとしました。

そして江戸後期には、地味な配色の振袖から赤い色をのぞかせる着こなしが流行、これも遊女たちを参考にしたものでした。

「花魁」は高級遊女だった

遊女には階級があり、時代により変化しました。

元吉原時代には、最高級遊女である太夫を頂点に、格子・端という三階級があり、太夫と格子を「花



五亀亭貞房画『傾城道中双六』（部分）文政10 [1827]